

松尾芭蕉と与謝蕪村

40期

I テーマ設定の理由

国語の授業で松尾芭蕉と与謝蕪村の生き方や精神の違いを扱った。同じ江戸時代の俳人であるが、芭蕉より少しあとの時期の蕪村は、芭蕉を意識した句を残しているという。具体的に、芭蕉が蕪村に与えた影響はどんなものか、実際の俳句の違いはどうか、などを調べ、考えてみることにした。

II 研究方法

1. 芭蕉と蕪村の俳句を、できるだけ多く鑑賞し、それぞれの印象や特徴を調べる。
2. それぞれの俳句の中から、同じ題材（同じ季語）の句を集め、その題材の解釈がどのように違うかを調べる。
3. 1. 2. のまとめとして、芭蕉と蕪村の俳句に対する考え方の相違を考えてみる。

III 研究内容

1. 芭蕉と蕪村の俳句の印象や特徴

<松尾芭蕉>

わび、さびの精神に基づいているため、地味でもの静かな印象を受ける。絵画の世界でいうと水墨画のようである。

初めて芭蕉の句をよんだときと、二度、三度と繰り返して味わってみたあとでは、その句の印象が非常に違う。初めは、単に季節の自然の美しさを詠んだものであると思っても、じっくりと読みしめると、その裏には複雑な芭蕉の心情が見えてきたりする。その奥の深さが興味深い。芭蕉は俗世間から離れて、孤独にひたることによって、自らの俳諧を確立させようとした。そのためか寂しい句が多い。しかし、意志の堅さ、芯の強さを内に秘めているのが、大きな魅力であると感じた。これらの特徴をまとめるのに鑑賞した句を、いくつか挙げておく。

芭蕉野分して^{たひ}盥に雨を聞く夜かな

雨もりがするような家に住む、貧しい生活を、芭蕉はしていた。この句での、「芭蕉」は松尾芭蕉のことではなく、植物の名前である。「盥に雨を聞く夜」を想像すると、じめじめした空しさのみを感じるが、「芭蕉野分して」、強い風が吹きつけて草が吹き分けられるという様子を重ね合わせると、句全体の印象が侘しさの中にも力強さが感じられるものになってくる。句の中で、「芭蕉」とは草のことを指しているが、松尾芭蕉自身のことであるようにもとれる。そうすると、風雨に打たれながら、貧しい生活の中でも俳諧に対する情熱が冷めることのない、芭蕉の姿勢が思われ、ますますこの句の力強さが増してくる。

野ざらしを心に風のしむ身かな

旅の出発を前にして、どこかの旅の空で野たれ死にをし、遺骸を野辺にさらすことになるかもしれないと覚悟し、そうなればそうなったまでのことと開き直ってはみたものの、その「心」に秋の風が冷たくしみとおってくるのを、どうすることもできないわが身であるという心情を詠んだ句である。

「野ざらしを覚悟した心に冷やかな風がしみとおる」という決意と悲壮感が伝わってくるが、「心」という語は二通りの意味を与えていることがわかる。「野ざらしを心に」で「覚悟の心」を表し、「心に風のしむ身かな」で「風が心にしみる」という、また別の心を表している。この句の季語は「風のしむ」で、秋の句である。秋風の冷たさを裏に秘めているからこそ、芭蕉の旅にかける決意と悲壮感が、より強調され、伝わってくる。

その他、次の俳句が特に「芭蕉らしさ」を出していると思われる。

槽声波を打って^{はらわた}腸水る夜や涙

死にもせぬ旅寝の果てよ秋の暮

この道や行く人なしに秋の暮

行く春や鳥啼き魚の目は涙

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる（辞世の句といわれている。）

<与謝蕪村>

芭蕉の作風を水墨画にたとえるならば、蕪村は色あざやかな水彩画である。蕪村の句のうちの多くが、光あふれるような華やかさを持っている。その明るさの中に、表現の確実さ、細やかさを見ることができる。その例として、

牡丹散って打ちかさなりぬ二三片

五月雨や大河を前に家二軒 この二句を挙げる。

数字を用いて数量を示すと、現実味が出すぎて、俳句をつぶしてしまうおそれがあると思うが、蕪村は数字の効果を良い方向に向け、表現の確実さが強調されている。確実さは、その句に落ち着きをもたらしているように思う。

初めに書いたように、蕪村の特徴として「華やかさ」が一番にあげられる。蕪村の句を色で表してみると、その華やかさがよくわかる。彼の句には「白」または白を表す言葉が非常に多く使われている。白という色は清らかなイメージとともに、品のある華やかさを持っている色である。これが蕪村の句が華やかであるという印象を、広めている。画家としても名人の名が高かつ

た蕪村だからこそ、美しい色彩と、正確な描写が、俳句の上でも絵と同じように可能だったのだらう。

・蕪村の「白」の句

白梅や誰がむかしより垣の外

白菊や一もと寒し清見寺

白萩は咲よりこぼすけしき哉

夜の蘭香にかくれてや花白し

白梅に明るる夜ばかりとなりけり(辞世の句)

2. 同題材の句の比較

<唐辛子>

青くてもあるべきものを唐辛子 芭蕉

うつくしや野分のあとの唐辛子 蕪村

どちらも唐辛子を詠んだ秋の句である。芭蕉は、青いままでもいいのに、唐辛子はなぜあんなに赤く色づいているのだらうという、少し非難めいた言いぶり、内心の赤色の美しさへの感嘆を遠まわしに表現している。それに対し、蕪村の方は、自分が感じた赤の美しさを、素直に「うつくしや」と表現している。また、強い秋風に草が吹き分けられて唐辛子だけが残ったという情景が、唐辛子の赤を強調している。

やはり、この二つの句にも1でまとめた、それぞれの特徴が表れている。軽い非難の裏の賛美を表現している芭蕉と、明確な、または率直な表現の蕪村。芭蕉には、言葉の奥にある真意を読みとるおもしろさを感じさせられるし、蕪村には、素直な、わかりやすい表現から、快い印象を与えられる。

<五月雨>

五月雨を集めて早し最上川 芭蕉

五月雨や大河を前に家二軒 蕪村

これらの二句は、どちらも「五月雨」と「川」の組み合わせであるが、受ける印象が大きく異なるので非常に興味深い。

芭蕉の句は、しとしとと静かに降る五月雨と、水量が増えて流れがはやくなった最上川が、緩と急、あるいは弱と動の動きを持っており、句全体に変化をつけている。また、蕪村の句は、五月雨と川に家二軒を加えて描写しているところが芭蕉の句との大きな違いである。五月雨と大河ではあまりに芭蕉と類似しすぎると考えたのか、降り続く雨によって増水した大河の前に、力なく建っている「家二軒」を加えることによって、芭蕉の句にはなかった、おもしろさができてい

る。「五月雨が降り注ぐ大河の前に家が建っている」ことを単に言うのではなく、その「家」が「二軒」であることまで詠みこんでいるのがおもしろい。前にも書いたが、蕪村は数字を、実に効果的に用いる。「家二軒」とはっきり示してしまうことで、鑑賞する側は、蕪村が見た情景と同じ情景をイメージすることができ、共感と親近感を持つことができるだろう。また、この細部までの描写は蕪村の画家としての「目」を感じさせられる。

<蘭>

蘭の香やてふの翅にたき物す 芭蕉

(訳) 蘭の香りが高く、その蘭は花にとまっている優雅で美しい蝶に似合いのものとしてその芳香を、蝶の翅にしきりに焚きこめている。

夜の蘭香にかくれてや花白し 蕪村

(訳) 香りがあまりに高いため、花自体の美しさが隠れがちだが、夜の蘭は、暗やみに花の白さがきわだち、いっそう美しい。

同じ「香」という言葉が入っているが、芭蕉の句の中心は「香」で、蕪村の句の中心は「白」である。これらの二つの句は、それぞれ切れ字が大きな役割を果たしている。切れ字とは、句の中での切れ目や区切りを示すものであるとともに、作者の感動の中心をよみとるためのものでもある。芭蕉の方は「蘭の香や」の「や」が切れ字であるから、「蘭の香」が句の中心である。蕪村の方は、「香にかくれてや」の「や」が切れ字であるから、「香にかくれて」が強調される部分であるのだが、何が香にかくれるのかを考えてみると、花の白さが香にかくれるのだから、句の中心は「白」である。蘭のどこに目をつけるか、芭蕉は香りに、蕪村は花の色に、心を置いている。

<行く春>

行く春を近江の人と惜しみける 芭蕉

(訳) 季節がめぐると同じように各地を旅しつづけて今、身をしばし、この近江にとどめている。古来、湖水の春光を愛してきたこの国の人々とともに、行く春を見送る。

ゆく春をおもたき琵琶の抱きごころ 蕪村

(訳) 花も散り果てて、春も過ぎ行こうとするころ、琵琶を手にして一曲奏でようとしたが、いっになく、琵琶の抱きごころが重いものに感じられるのは、春を惜しむ気持ちの深さからだろうか。

独り身の芭蕉が思い立つままに旅に出ることができたのに対し、家庭のある蕪村はそれが許されなかった。旅先で出会った人々とともに、美しい春が去りゆくのを惜しむ芭蕉の句からは、お

おらかな広々としたものが伝わってくる。また、琵琶の重さで感じた惜春の思いは繊細で優しさにあふれている。蕉村が芭蕉の句を意識して、この句を詠んだのかどうかはわからないが、私は意識していたのだと思う。“行く春”を、芭蕉は旅という、家の外で感じたのなら、自分は家の中にいて、芭蕉以上の“行く春”をうたいあげてみせようという蕉村の気持ちが、この句にあると思う。

3. 辞世の句

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる 芭蕉

(訳) 旅の中途、死の床に病み臥しながら、夢の中ではなお枯野をかけめぐっている。

しら梅に明るる夜ばかりとなりけり 蕉村

(訳) 夜がしらみはじめるころ、白梅の香がほのかにただよってきて、夜のやみはその白い花のあたりから明けはじめる、美しい季節となった。

多くの放浪の旅を経験した芭蕉は、やはり最後の句にも“旅”が出てきた。“夢は枯野をかけめぐる”の部分について、今まで体験したことを思い出している。「夢」なのか、もう一度旅をして枯野を歩くことができたらいいだろう、旅をしたいという、「夢」なのか、二通りの受けとり方ができるが、やはり後者の方がふさわしいように思う。夢の場が枯野であるところがまた、芭蕉らしい。病にとりつかれているというのに、何事もなかったように静かな美しい朝を詠んだ蕉村。全く違うといえば違う二つの句であるけれども、両方とも死を感じさせないおだやかさがあるところに魅かれる。素直に死を受け入れているけれど、それは生へのあきらめではないように思う。あきらめの投げやりな気持ちでは、夢は見れないし、春の足音を聞くこともできないだろう。

IV 結 論

芭蕉と蕉村のそれぞれの俳句の特徴や印象を調べていくうちに、それらが違うところはあっても似ているところが全くなく、“蕉村の尊敬した芭蕉”、“芭蕉が影響を与えた蕉村”という前提で始まった研究なので、あまりの違いにたいへん困った。研究の前提に不安を持ち始めていたが、研究の最後の方に次の句を見つけ、その不安は消しとんだ。

金福寺 芭蕉翁墓

我も死して碑に^たせむ枯尾花 蕉村

(訳) 私もいずれ死ぬだろうが、そのときは枯尾花の咲く芭蕉の墓のそばに葬ってほしいものだ。

それぞれの俳句の特徴をみても、同題材の句の比較の結果をみても共通点は挙げにくい。共通点どころかすべてにおいて対照的でさえある。俳句に対する考えも、芭蕉は自分の心の軌跡を残すためのもの、蕉村は美しいものに対する自分の感動を記録しておくもののように思う。

考えてみれば、いくら蕉村が芭蕉を尊敬したからといって、芭蕉の持つものをそのまま受け継いでいるとは言えないのだ。前に書いたように、蕉村が芭蕉の句をみて、感動し、尊敬したのは確かだろう。しかし、蕉村は、芭蕉を模倣することはせず、自分の世界を作り上げたのだと思う、蕉村本人以外には気づかないところで、彼の句は芭蕉の流れをくんでいるに違いない。俳句の世界を開拓した、偉大な芭蕉の存在は、蕉村の大きなプレッシャーとなっていただろう。そのプレッシャーと闘うには、芭蕉とは異なる世界を築き上げる必要があった。そして、蕉村はそのことに成功したと思う。

V 総 括

<残された課題>

自分自身でも結論が確かな形で打ち出せないのが残念である。この研究は最終地点がないに等しいのでたいへん奥が深い。俳諧というひとつの文化の全体の状態、時代的な背景などを重ねあわせて研究すると、もっといろいろな解釈が生まれるだろう。今回は、とてもそこまで手が届かなかった。

<反省・感想>

自分で考えることが中心の研究で、かなり一生懸命考え、自分なりの言葉で表していくことができた点では満足している。ただ、文献に頼らずにやろうと思いついて、行き詰まったときには苦勞した。文献に頼りすぎないことも大切だが、ある程度はよい文献を集めておくのも大切だと思う。

俳句という、あまりなじみのないことについて研究しはじめたのだが、俳句の魅力もだんだんとわかってきて楽しかった。17音という少ない字数でさまざまな思いを表現することの難しさも感じた。

3回目の自由研究でやっと、充実した研究ができたことがとにかくうれしい。

VI 参考文献

- ・国文学 解釈と鑑賞 1978年3月号
—天明の詩人 与謝蕉村—
- ・芭蕉の世界 (尾形 侑)
講談社学術文庫